

点描ぐんま経済

日銀支店長

見聞録

■139■

いよいよ夏本番。山では、高山植物が咲き誇る季節だ。そこで、念願だった尾瀬へ。

まず6月初旬に親子三代で1泊旅行。燧ヶ岳と至仏山を前後に見ながら木道を歩いていくと、宿泊先の東電小屋の近くにミズバシヨウが群生していた。行きすがら、花を1輪見つけては立ち止まって騒いでいた自分が恥ずかしくなるほど、まさに極楽仙境といえる風景だった。

翌日は早起きして散策。風の音と鳥の声。そのほかには、自分の呼吸

自然への恩返し

尾瀬の極楽風景を守る

しか聞こえない。ピンと張りつめた空気のなかを黙々と歩いて、自然の素晴らしさを堪能できた。そして今月の連休に

は、妻と2人でニッコウキスゲを目当てに再訪。山ノ鼻の研究見本園では、クマが出没したらしく、職員の方々が花火などで追い払ってくれていた。肝を冷やしなが

派手な黄色のニッコウキスゲが一面に咲いていた。

幸運なことに、この日も天候に恵まれ、最高の思い出となった。

わが国では、尾瀬国立公園をはじめとする自然公園のほとんどが無料で楽しめるが、その維持管理には大変な手間とコス

トがかかっていることは忘れてはいけない。尾瀬では、木道やトイレの整備に、行政や東京電力グループが尽力してくれている。自然の恵みをいただく者として、相応の対価を支払うべきだとも思うが、実はそう簡単な話ではない。

まず、入園料を誰が得るのかという点。土地の所有者なのか、公園の管理者なのか。国内の国立公園は、必ずしも国の持ち物ではないのだ。

次に、入園料が一律でいいのかという点。子どもや高齢者など、配慮が必要なたちがいるだろう。ある研究によれば、

諸外国の多くが国立公園で入園料を徴収しているそう。特に途上国で

は、インバウンド（訪日客）に対して、その国の所得水準に比べるとかなり高額料金設定にしているとのこと。こうした「自然の価値」を価値化する考え方については、わが国でも議論されている。

入園料がないので何かできることはないか。そう考えて、自然公園や山では、必ず、ごみを一つ拾うことにしている。この活動は勝手に「一登一善」と名付けている。自然への恩返し、皆さんもやりませんか。



宮 将史(みや・まさふみ)

1974年生まれ。神奈川県出身。一橋大経済学修士。2000年日本銀行入行、政策委員会室国会渉外課長などを経て24年7月から現職